

【コメント】

専攻語としてのLCTL教育とコミュニケーション

藤家 洋昭

大阪外国語大学

1. はじめに

LCTL（学習機会の少ない言語）は、文字通り学習機会が少ないが、その中のいくつかは、わが国においては大学で専攻語として学ぶことができる。本稿は、トプラマオール氏による、大学の教育現場におけるトルコ語を例としたLCTL教育の問題点の指摘に対するコメントである。

2. LCTLとは

LCTL(Less Commonly Taught Language(s))とは学習する機会の少ない言語のことである。トルコ語は、特に日本においてはLCTLのカテゴリーに入るであろう。俗にマイナー言語などと呼ばれることがあるが、マイナーであることと学習機会が少ないことはかならずしも同じではないので注意が必要である。例えばイタリア語とトルコ語を比べた場合、後者の方がマイナーであるが、話し手の数は同程度である（むしろトルコ語の方が多いかもしれない）。ドイツ語とインドネシア語では、誰が見てもインドネシア語の方がマイナーであるが、使用人口はインドネシア語の方が圧倒的に多い。しかしながら学習する機会はドイツ語の方が圧倒的に多い。

3. LCTL学習者の悩み

現在地球上に存在する言語の数は数千といわれているから、地球上の言語のほとんどが実はLCTLである。それらの言語を学習しよう、あるいは学習中の人がどのような悩みをかかえているか、筆者周囲の学習者の意見ももとに考えてみた。

- ・教材がない／少ない

一つでもあればいい方で、教材が全然ない言語もある。学術的な記述文法書はあるが学習書がないという言語もある。

・辞書がない／少ない／不親切

不親切とは、中学生用の学習辞典のような説明がなく、ただ単に訳語がのっているだけという意味である。なお、筆者は初級の段階では辞書は必要ないと考えている。

要するに、ないない尽くしということである。

それでは大学の専攻語としての教育はこれらの解決になるか、ということになる。

4. 大阪外国語大学におけるLCTL

大阪外国語大学では、24（日本語を含めると25）の言語が専攻語として教えられている。専攻語として教育されている言語の内、いわゆるメジャー言語を除いた言語がLCTLであり、この中には、ハンガリー語のように日本で唯一教育が行われている専攻語もある。

カリキュラム等の教育システムは、基本的にすべての言語で同じであり、LCTLであるかどうかの違いはない。授業時間数も同じである。どの専攻語にもネイティブスピーカーによる授業がある。

言語による違いを強いてあげるとするならば、英語以外のすべての専攻語がゼロから教育をスタートするのに対し、英語はそうではないということである。

5. 問題点

大学のトルコ語教育現場における問題点の指摘がトプラマオール氏の主な主張であったと理解するので、ここではそれらの列挙を繰り返すことをやめ、いくつかについて筆者の考えを述べることにする。

大学におけるLCTL教育において、学習効果があがらない原因の一つとして、トプラマオール氏も指摘しているとおり、学習側の学習意欲があげられている。LCTLは活用の機会が少ないので学習意欲がわかないというわけである。この点は確かに否定できないが、当該言語が話されている地域に旅行に行く学生は多いし、また、語学留学に行く学生も決して少ないとは言えない。むしろ、専攻としてその言語を学んでいながら、語学留学をする学生がいることの方が問題であると考えられる。専攻語として学んだ学生もそうでない学生も同じように現地の語

学学校で机を並べて勉強するようでは、いったい何のための専攻語教育かということになる。

むしろ、ここで強調しておかなければならないのは教える側の問題である。これには、教える側の姿勢・意識・技術等さまざまなものが含まれる。

LCTLを教育している大学は限られる。そのため、存在自体価値があると思われているふしがある。存在自体価値があるのでそれ以外のことは二の次である。当然、教授法・授業改善も二の次にされている。

筆者は、第2言語教育というものは中学であれ高校であれ大学であれ基本は同じであると考えている。学習者に運用能力をつけることである。この場合運用能力とは、旅行会話その他の狭義のものではない。新聞が読めることも、その言語で論文が書けることも運用能力である。しかしながら、大学教育の現場で運用能力をつけることをめざして教えられているか、明らかではない。概して、大学の教員というものは実利的なものを軽蔑する傾向がある。このためか、言語教育の現場においてもやたら理屈っぽくなったり、あるいは授業形式が実習ではなく講義になってしまったりしている。理屈だけでは言語の運用能力はつかないのである。なお、筆者の研究としての専門は、主辞駆動文法による言語記述である。そこでは抽象的なデバイスを用いて議論しているわけであるが、それを語学実習の授業に持ち出すことは決してしないよう厳につつしんでいる。

教材の選定と作成についてもふれておく必要がある。

いくらLCTLといっても、大学の専攻語として教えられるような言語であれば、教材がまったくないということなどない。少なくともトルコ語に関しては、選ぶのに困るほど教材がある。それらの教材を吟味し、どの教材がもっともふさわしいか選定する作業が重要なことであることは言うまでもない。しかし実際には、既存の教材を吟味することなしにいきなりオリジナル教材を使用する例が見られる。概して、大学教員には自著を用いて授業をしたがる、という傾向が見られる。第2言語教育は大学の他の教育科目と性質を異にするものであるから、このあたり再考する必要があると考える。

6. まとめ

大学教育の現場においてLCTL教育があまり効果をあげていないのは事実かもしれないが、学習者側の意欲のせいにはせず、教える側が再

考しなければならないことが多い。存在するだけで価値があるという思い込みを捨て、教育ということをもう少し真剣に考える必要がある。